

島原城新能



神事火入れの儀 午後六時二十五分
第二部開演 六時 四十分

番組

観世流 仕舞

弓八幡 ののみや 野宮

シテ 森本 哲郎
シテ 観世 喜正

地謡
藤井 丈雄
今村 一夫
北浪 貴裕
山中 雅志

肥前島原子ども狂言二十周年記念祝賀狂言

和泉流 狂言

三本柱 さんぽんのはしら

シテ 果報者 野村 万緑
アト 太郎冠者 能村 晶人
アト 次郎冠者 吉住 謙
アト 三郎冠者 吉良 博靖

後見
上杉 圭太
杉山 俊広
雪野 洸太

観世流 能

船弁慶 ふなべんけい

子方 源義経 多久島法子
前シテ 静御前 馬野 正基
後シテ 平知盛の怨霊 江崎欽次郎
重前後之替 ワキ 武藏坊弁慶 江崎 太朗
ワキツレ 義経の従者 江崎 太朗

大鼓 白坂 保行
小鼓 幸 正佳
笛 森田 光次

アイ 船頭 野村 万緑

後見
北浪 貴裕
山中 雅志

地謡
井内 政徳 久保誠一郎
小早川泰輝 森本 哲郎
今村嘉太郎 観世 喜正
山口剛一郎 今村 一夫

(午後八時五十分終演予定)

観世流 仕舞「弓八幡(ゆみやわた)」

高良(こうら)の神がきびきびとした所作で颯爽と舞う、後場の「神舞(かみまい)」が見どころの脇能わきのう(神を主役とする能)です。同じく脇能「高砂(たかさご)」とともに「真の脇能」と呼ばれ、脇能のなかでも格調が高い作品です。

作者の世阿弥が、自身の芸談書『申楽談儀(さるがくだんぎ)』で本作品をすつきりとした風情ふぜいのある能と自作を評しています。本作品の舞台・男山八幡宮(石清水八幡宮)は京都府・男山にある神社で、九州の宇佐八幡宮から都の守護のため勧請(かんじよう)されました。皇室の信仰が厚く、歴代天皇が多く行幸(みゆき)したため、伊勢神宮に次ぐ第二の宗廟(そうびよう)に位置づけられています。

観世流 仕舞「野宮(ののみや)」

晩秋の嵯峨野を訪れた旅の僧(ワキ)が昔の野宮の旧跡を拝んでいると、一人の女(前シテ)が現れる。折しも今日・九月七日は、光源氏が野宮にいた六条御息所のもとを訪れた日。女は往時の様子を語り、手にしていた榊の枝を神前に手向けると、その時の御息所の心の内を明かす。彼女は、自分こそ御息所の霊だと告げると、姿を消してしまうのだ。

その夜、僧の夢の中に、牛車に乗った一人の貴婦人が現れる。彼女こそ、御息所の幽霊(後シテ)であった。御息所は、賀茂祭の車争いで負った心の傷を語り、寂しげな野宮の様子を見て感傷に浸りつつ、舞の袖を翻す。しかしやがて、彼女は再び車に乗ると、ひとり去ってゆくのであった。変わりゆくものと、変わらぬもの。往時のままの野宮の光景に、御息所の心には過去への妄執が湧き起り、自問自答を繰り返す。彼女の記憶とは、想いとは、人生とは、何だったのか……

和泉流 狂言「三本柱(さんぽんのはしら)」

大果報の者(富を得た幸せ者)は、新しい建築(普請)もほとんど完成したことを喜び、家来である三人の冠者を呼び出すと、金蔵の柱にする吉祥の木三本を上からの持つてくるように言います。ただし、三本の柱を三人で二本ずつ持つてくる事を条件にします。山に着いた三人は柱を見つけ一本ずつ持ち山を下り始めますが、途中で柱を下ろして休みます。すると太郎冠者が主人から言われたことを思い出し、三本の柱を三人で二本ずつ持つ方法を、次郎冠者と三郎冠者に相談します。三人はこの難題を解決できるでしょうか。

普請(建築)とは、そもそもお目出たい慶事であり、三人が喜んで囃子物に乗って柱を運んでくるなど、祝言性にあふれた作品です。

観世流 能「船弁慶(ふなべんけい)」

兄頼朝と不和になり、西国へ落ち延びてゆく源義経(子方)の一行。その途上、摂津の国(兵庫県尼崎市)大物浦に至った彼は、弁慶(ワキ)の進言を受け、これまで供をしてきた愛妾・静御前(前シテ)を都へ帰すこととする。別れを悲しむ静だったのが、最後の酒宴に華を添えるべく、彼女は烏帽子を着して謡い舞い、義経の今の境遇を慰めつつ彼の前途を祈念する。静は、一行の門出を祝して健気に舞い納めると、出発してゆく一行を涙ながらに見送るのだった。

瀬戸内海へと漕ぎ出した一行の船。ところが、風雨は次第に激しさを増し、辺りはただならぬ雰囲気となる。そのとき、行く手の海上に平家一門の亡霊が現れた。総大将・平知盛(後シテ)をはじめ、一行に襲いかかる怨霊たち。しかし弁慶は懸命の祈りによって対抗し、一行は辛くも難を逃れるのだった。



吉谷 潔



白坂保行



多久島法子



野村万緑



森本哲郎



江崎欽次郎



観世喜正



馬野正基